蕃務本署体制の確立と台湾原住民の「内地」観光

―一九一一年の第二回・第三回「内地」観光を中心に―

松田京子

台湾原住民を対象とした「内地」観光は、領台初期の一八九七年から資料で確認できる範囲では少なくともアジア太平洋戦争開戦直前の一九四一年四月まで実施されている。このような長期にわたって実施された「内地」観光という施策の具体像は、どのようなものであったのか。またこのようないわば「非日常」の体験は、台湾原住民社会の日々の生活にどのように関わっていたのかを、「内地」観光に参加した具体的な「勢力者」「先覚者」に焦点をあてながら、論じていきたい[1]。

ここで当該テーマに関する研究状況を概観しておこう。台湾原住民を対象とした「内地」観光については、特に一八九七年に行われた第一回を中心に、上野史郎による先駆的な研究をはじめとして、その具体像の解明を意図した研究が蓄積されてきたといえる[2]。それと並行して、長期間におよぶその全体像を概観しようとする研究も行われてきた[3]。また阿部純一郎は、その著書の中で、全般的な時期を対象に、〈比較〉の実践としての観光という観点から、その統治技術としての側面について論じている[4]。

このように台湾原住民の「内地」観光については、研究が深化しているといえるが、時期によって変化する台湾原住民政策と、「内地」観光施策はどのように関連するのかといった観点からの考察は、第一回「内地」観光を対象とした研究を除くと、まだ充分ではないと思われる。そこで本稿では、台湾原住民政策として大規模な武力による「討伐」服従化政策である「五箇年計画理蕃事業」が実施された一九一〇年代前半に焦点を絞り、その時期の台湾原住民

の「内地」観光について、政策的な側面を重視して論じていきたい。

第一章　蕃務本署体制の確立と「内地」観光

第一節「内地」観光という施策

台湾原住民を対象とする「内地」観光は、管見の限りでは一八九七年から一九四一年まで少なくとも二一回、実施されている。その内、一九二八年の第八回「内地」観光は、台湾原住民自身が費用を出して行われた「自費」観光であり、参加者がそれまでの「勢力者」中心から「先覚者」中心に移行するという点で画期とされ、それ以前を前期、以降を後期として二つに大別して論じられてきた。[5] その区分に異論はないが、しかし「内地」観光の状況を詳細に検討すると、実施の背景と内容において次の五つに時期区分できるという見通しをもっている。第一に、領台初期の一八九七年に試行的に行われた第一回、第二期として、「五箇年計画理蕃事業」実施という状況下で、短期間に集中的に行われた第二回（一九一一年四月）、第三回（一九一一年八月～九月）、第四回（一九一二年四月～五月）、第五回（一九一二年一〇月）。第三期として、「先覚者」が主導的役割を果たし、「自費」観光が試みられる第八回（一九二八年）、第九回（一九二九年）、第四期として霧社事件での中断をへて、一九三〇年代半ばに集中的に実施された第一〇回～第一五回（一九三四年～一九三七年四月）、そして日中戦争が全面化し総力戦体制となっていく中で実施された第一六回～第二一回（一九三八年～一九四一年四月）である。[6]

本稿では、先述のとおり第二期を中心に分析を行いたい。ただし第二期の詳細を検討すると、一九一二年に実施された第四回と第五回は、当時「北蕃」と呼ばれたタイヤル族のみに対象を限定して行われており、複数の「種族」を対象として実施された第二回、第三回とは、その目的や様相がやや異なっている。そこで本稿では一九一一年に行われた第二回、第三回に焦点を絞って考察を行い、一九一二年の「内地」観光および第三期以降については稿を改めて論じたい。

第二節　蕃務本署体制の確立と「五箇年計画理蕃事業」

そこで、まず第二回、第三回の「内地」観光が実施された一九一一年当時の台湾原住民政策について、概観しておきたい。すでに拙著でも詳述したように、一九一〇年代前半は、主に「北蕃」を対象とした大規模な「討伐」服従化政策が実施された時期であった。[7] 具体的には一九〇六年に着任した第五代台湾総督佐久間佐馬太のもと、一九〇七年一月、台湾総督府は「蕃地経営」の力点を「北蕃」におくことを方針とするいわゆる第一次「五箇年計画理蕃事業」の実行を決定した。[8] この政策は「成ベク政府意思ノ在ル所ヲ懇諭シ彼等ヲシテ之ヲ甘諾セシムルノ方針ヲ取リ、万止ムヲ得ザル場合ノ外、討伐ヲ為サヽルモノトス」[9] と表面上は「甘諾」政策を装いつつも、以前から設置されてきた「隘勇線」[10] に地雷を埋設したり高圧電流を流して増強し「蕃地」を囲い込むとともに、「蕃地」の測量や地図作成をはじめとした土地調査事業を本格的に開始し、「蕃地」の完全国有地化・官有地化に乗り出すこととなった。[11]

事実、一九〇七年段階でも、台湾原住民に対する「討伐」作戦は「隘勇線前進」という名のもと各地で実施されていた。「隘勇線前進」とは、武力を背景に対原住民防備の境界としての隘勇線を、原住民居住地を狭める形で移動させることを意味したが、それに対する原住民の抵抗は激しく、多くの場合、武力による衝突となった。同年七月には、侍従武官が台湾に派遣され「隘勇線前進ノ状況ヲ実視」するために台湾の各地を巡視するとともに、「隘勇線前進」作戦に携わった者に対して「酒肴料」、負傷した者に「菓子料」が下賜されている。[12] 一九〇八年にも「宜蘭庁大南澳方面」「南投庁霧社方面」をはじめとして「隘勇線前進」作戦は行われ、同年の九月にも侍従武官による「蕃界」巡察と「隘勇線前進」作戦に従事して負傷した者への慰問が行われており、この作戦実施には日本本国からも強い関心が払われていたといえよう。[13]

一九〇九年一〇月には台湾総督府官制の改正が行われ、総督府民政部に内務局、財務局、通信局、殖産局の四局と並んで、原住民政策の専従機関である蕃務本署が置かれることとなった。勅任官の蕃務総長が「蕃務本署ノ長ト為リ

総督及民政長官ノ命ヲ受ケ其ノ主務ヲ掌理シ其ノ事務ノ執行ニ関シ庁長及警察官ヲ指揮監督」[14]する体制となったのである。そして蕃務本署には蕃務課と庶務課の二課が置かれ、初代蕃務総長には大津麟平が、蕃務課長には中田長温、庶務課長には加来倉太が任命された[15]。

またこの総督府官制の改正の中で、「総督ハ其ノ管轄区域内ノ安寧秩序ヲ保持スル為ニ必要ト認ルトキハ兵力ヲ使用スルコトヲ得」[16]と台湾総督の管轄区域内での兵力使用権が確認され、大規模な「討伐」作戦実施への法的な基盤が整えられた。そして翌一九一〇年より第二次「五箇年計画理蕃事業」とは、「兇蕃ヲ掃蕩シ道路ノ開鑿隘線ノ歩進ニ着手セン」[17]とするもの、すなわち「北蕃」を対象とした大規模な「討伐」服従化作戦の実施を主とするものであり、前年の蕃務本署の設置はそのための体制強化であったといえる。この蕃務本署体制下で、一九一〇年五月からは「ガオガン蕃方面隘勇線前進」作戦が実施されることとなるが、この作戦は「宜蘭庁方面」「新竹庁方面」「桃園庁方面」と三方向から行われ、同年一一月までの約半年間に及んだ。また警察官・「隘勇」・人夫からなる行動部隊としてのべ六千人以上を動員し、軍隊の援護も受けて展開された大規模「討伐」作戦であった[18]。そして同年一二月からは「霧社方面討伐」作戦が実施され、南投庁長を討伐隊長とし警部以下千人を超える討伐隊を編成し、三次に分けて作戦を行った[19]。一二月に行われた第一次作戦では、「トロツク蕃」と「タウツアー蕃」が対象となり、主に「トロツク蕃」に対して砲撃が行われた。砲撃を受けた「蕃社」では火災が発生し、さらに直撃を受けた頭目の叔父は「四肢断裂シ其ノ他死傷尠カラス」という状況で、恐怖心が広がったという[20]。さらに翌一九一一年一月に行われた第二次作戦では、「霧社蕃」が対象となり、特に「ボアルン社」「スウクー社」に対して砲撃が行われた[21]。そして二月には「白狗マレッパ及バイバラ」を対象とする第三次作戦が行われ、三月下旬に作戦全体が終了したが、この「霧社方面討伐」作戦の結果、台湾原住民が所持していた銃器一二一〇挺が押収されたという[22]。

さらに一九一一年には「北勢蕃討伐」作戦が新竹庁長を討伐隊長とし一八〇〇名余の討伐隊を組織して四月から六月にかけて実施され[23]、七月から八月にかけては「パイワン

族傀儡蕃」を対象とした「トア社討伐」作戦が、阿緱庁長を討伐隊長とする一千百名余の討伐隊に加えて、宜蘭庁と桃園庁から警部一名、警部補二名、巡査一七七名の応援をうけて実施された[24]。また「李崠山方面隘勇線前進」作戦が八月から十月にかけて、新竹庁長のもと二千百名を超える隘勇線前進隊を編成して行われ[25]、さらに「バイバラ方面隘勇線前進」作戦が九月から南投庁長を前進隊長として行われ、十月からは台中庁長を前進隊長とする作戦行動も加わった。その結果一〇月末に作戦は終了し、南投庁は「ハイバラ蕃」の勢力下にあった「二方里余ノ土地」を新たに包含し、台中庁も「イチハブガイ部落」を包容したという[26]。このような中、一九一一年四月には前年の「台湾蕃匪討伐従事者」の「功労」に対して「明治二十八年勅令第百十五号」を準用して論功行賞を行うことが定められた[27]。すなわち戦争状態に準じた軍事作戦における「功労」として、取り扱われることとなったのである

このように本格的な武力による「討伐」作戦が展開される一方で、一九一〇年四月には政府への帰順の意思を示した台湾原住民への教化策の一つの手段として、宗教的感化という観点から、布教師の配置が試験的に始められた。このことは蕃務本署が置かれた直後の一九〇九年一〇月に、真宗本派本願寺台北別院輪番紫雲玄範が大津蕃務総長を訪ね、「蕃人」教化のために布教師の派遣を提案したことに端を発したという。その後、京都本山本願寺の同意を得て、紫雲玄範を蕃務本署嘱託に任命し、紫雲によって派遣布教師八名が選定された。派遣布教師の身分は蕃務課嘱託として官費により駐在することとなり、まず「台北新店屈尺駐在所、宜蘭叭哩沙圓山駐在所、同羅東スタヤン駐在所、新竹南庄大東河駐在所、新竹樹杞林上坪監督所、台中東勢角白毛駐在所、南投埔里社霧社駐在所、同集々ナマカバン駐在所」の八ヶ所に八名の僧侶が配置された[28]。この布教師配置の目的について、大津麟平は次のように述べている。

蕃人亦宗教心アリ、日常ノ生活之レニ依テ指導セラル、而モ最モ強キ指導力ヲ有スルモノナリ、故ニ蕃人ヲ統治セントスルモノハ必ス此ノ宗教心ヲ度外視スヘカラス、…（中略）…此信仰又ハ迷信ハ彼等ヲ駆テ能ク善事ヲナサシメ又能ク悪事ヲナサシム、彼等ノ社会ニ於ケル一大勢力ナリ、之レヲ指導シテ悪ヲ去テ善ニ遷ラ

シムルハ宗教家ヲ以テ最モ適当トス、此ニ於テ蕃界ニ布教師ヲ採用セリ…（中略）…蕃人教育ハ徳育ニ重キヲ置ク要アルヲ以テ布教師ヲシテ教育事業ト連絡ヲトラシメ教育ト宗教トヲシテ相背馳セシメス相調和シテ以テ蕃人ノ品性陶冶ニ協力セシメンコトヲ希図シタリ[29]

つまり台湾原住民の信仰心に着目し、それを指導して統治を円滑に行うために布教師を採用して「蕃地」に派遣し、さらに布教師が原住民の教育に貢献することも期待したのである。例えば、大津蕃務総長は、先に述べた「霧社方面討伐」作戦実施直後の一九一一年三月に「霧社蕃バーラン社」を訪問し、「各社頭目以下蕃丁蕃婦蕃童数十名」を集めて訓示した際、次のように述べたという。

トロツク、タウツアー、ヲ始メ霧社蕃迄討伐セシカ之ニ由リテ汝等ハ日本ノ強キ事ヲ大ニ悟リシナルヘシ。汝等ハ唯一ノ武器タル銃器ヲ持チシニ拘ラス日本ニ服従セサルヘカラサルニ至リシハ、畢竟日本ニハ武器ノ外智識カ汝等ヨリハ優レルカ故ナリ。智識アレハ独リ戦争ニ強キノミナラス、人ヲ賢クシ幸福ナル生活ヲナスノ基ト為ルモノナリ。此ノ智識ヲ授クルノ任ニハ此所ニ居ラルル安部布教師カ当ラルル筈ナリ。此ノ人ハ汝等ヲ賢クスル為メニ総督閣下ヨリ派遣セラレシモノナリ[30]

霧社駐在所には真宗本願寺派の僧侶・安部道溟が妻とともに派遣されていたが[31]、大津蕃務総長は、今回の「討伐」の結果、「霧社蕃」が日本に服従せざるを得なくなったのは、日本人が知識の面でも優れていたためであり、知識の有無は戦争に強くなるだけでなく幸福な生活の礎でもあり、その知識を授けるために布教師が派遣されていると霧社の人々に諭したのである。大津蕃務総長は、この段階では、原住民の「教化」という観点から布教師が具体的な役割を果たすことに大きな期待を持っていたといえよう。

そして一九一一年四月から実施される第二回「内地」観光には、この霧社に派遣されていた布教師・安部道溟が大きく関わることとなるのである。

第二章　第二回「内地」観光（一九一一年四月）

一八九七年の第一回「内地」観光から、一〇年以上たっ

た一九一一年、台湾原住民を対象とした「内地」観光が二回、計画・実施された。一九一一年四月に実施された「内地」観光を、ここでは一八九七年の第一回を念頭に第二回「内地」観光と、同年八月から九月にかけて実施されたものを、第三回「内地」観光と呼び、その内容について考察していく。

一九一一年四月一日から四月二七日まで、台北庁から一名、桃園庁から三名、嘉義庁から一名、阿緱庁から三名、台東庁から二名の計一〇名の台湾原住民を参加者とする「内地」観光が実施された[32]。今回の「内地」観光は、桃園庁警部長谷川照雄と南投庁霧社駐在の本願寺派僧侶・安倍道溟を引率者とし、京都の本願寺宗祖大師六百五十回忌法要を機として実施されたものであるため、訪問先は京都以西の大阪、神戸、姫路、小倉、枝光とするものであった[33]。

第一節　参加者

参加者については、「蕃人中ヨリ採用シ内地語ニ諳熟スル巡査補雇教員又ハ他日蕃語教習ノ助手タラシムヘキ見込アル者並内地語ニ熟達シ若ハ之ヲ解セサルモ日本的精神ヲ蕃社内ニ普及セシメ得ヘキ実力アル者」[34]という条件のもと、各庁長に照会して選定された者であり、桃園庁角板山社頭目のタイモ・ワタン、桃園庁「ガオガン蕃」テーリック社頭目のユーミン・ロックン、台北庁ウライ社の頭目の子ユーカン・セツといった「勢力者」三名、それ以外の七名はすべて巡査補や蕃童教育所の助教師などに従事しており日本語に精通していたという[35]。また参加者の「種族」内訳は、タイヤル族四名、パイワン族四名、プユマ族一名、ツオウ族一名と報道されており[36]、比較的多様な構成だった（【表一】参照）。参加者の年齢は、最年長のタイモ・ワタンが三八歳、最年少は一七歳とされている。今回の参加者は、頭目ら比較的年長の「勢力者」三名と、なんらかの形で日本の教育を受けた巡査補など日本語が堪能な若年の「先覚者」七名という構成だったといえる[37]。また「内地」観光中も、日本語が話せる七名は饒舌に話すのに対して三名は「日本語が話せないから黙り詰め」、服装も三名は「赤毛布を袈裟掛にした」服装なのに対して、他の七名は「洋服や和服」と、その違いは際だっていたようである[38]。

【表一】第二回「内地」観光参加者

蕃社名	種族	職業	氏名	年齢
桃園庁角板山社	タイヤル	蕃童教育所雇教員	イバン、ブルナ	三二
同	同	頭目	タイモ、ワタン	三八
同ガオガン蕃デーリツク社	同	同	ユーミン、ロツクン	三三
台北庁ウライ社	同	頭目ノ子農業	ユーカン、セツ	二六
嘉義庁チヨポウウ社	ツオウ	巡査補	ヤシユグ、ボーユ	二三
阿緱庁外マリツパ社	パイワン	恒春種畜所傭員	ルトグサン、クリウ	一七
同同社	同	萃芒公学校雇教員	ラパラプ、ラガラン	一七
同ブリイツ社	同	巡査補	ルシババン、プリピジ	一八
台東庁卑南社	プユマ	同	カストル	三〇
同サイアサイ社	パイワン	同	レギル	三〇

※猪口安喜編『理蕃誌稿　第三編』（台湾総督府警務局、1921 年）、P.196 および「台湾日日新報」1911 年 3 月 29 日掲載記事「蕃人内地観光」より筆者が作成。

「勢力者」三名の内、角板山社頭目タイモ・ワタンの故郷である角板山一帯は、一九〇七年に「隘勇線前進」作戦の対象となった。隘勇監督署が置かれた角板山は、その後、帰順した原住民の教化政策の拠点として、例えば一九〇九年一〇月には角板山蕃童教育所が開設されるとともに、周辺の「未帰順蕃」に対する「討伐」作戦の拠点、物資供給の要所としても整備されていき、一九一〇年には大渓から角板山に至る軽便軌道が敷設されている。[39] タイモ・ワタンは、原住民教化の先進地であり周辺一帯の原住民政策の実施にとっても重要な「蕃社」の頭目として、選出されたといえよう。

またユーミン・ロックンの故郷「ガオガン蕃」テーリック社は、先に述べた一九一〇年五月からの「ガオガン蕃方面隘勇線前進」作戦において、「討伐」の対象となった「蕃社」の一つであった。テーリック社はその近隣の「蕃社」とともに、「討伐」作戦の攻撃を受けた結果、一〇月下旬に帰順することになる。[40] 一〇月二〇日に帰順条件伝達式が行われ、帰順条件として数日以内に所有する銃器弾薬をすべて提出すること、もし遅れたら直ちに砲撃するという条件がその場に集められた「ガオガン左岸蕃及マリコワン蕃頭目、副頭目」等に示達された。それを受けてテーリック社頭目のユーミン・ロックンは出席の頭目、副頭目を代表して、次のような回答を行ったという。[41]「隘勇線ヲ前進スル為各大官ノ来社サレタルハ我等ノ歓フ所ニシテ御示達ノ趣旨ハ能ク之ヲ領会セリ。初、日本政府ト渓頭蕃トハ共謀

シテ我等ノ蕃社ヲ討伐セムトストノ説ヲ耳ニシタルヲ以テ、マリコワン蕃ト力ヲ協セ前進隊ニ反抗シタリ。唯今ノ命令ハ各自社ニ帰リ蕃丁等ニ伝達シ之ヲ持参セシムヘシ。但蕃社中ニハ銃器ヲ所有セサル者モ亦之レ有ルニ由リ之ヲ諒トセラレムコトヲ乞フ[42]」と。ユーミン・ロックンは、一九一〇年の「ガオガン蕃方面隘勇線前進」作戦およびそれが台湾原住民の帰順という結果に終わったことを象徴する人物だったといえよう。第二回「内地」観光における勢力者の人選は、このような台湾原住民政策の状況を背景として行われたのである。

第二節　「内地」観光の内容

「内地」観光参加者一行は、一九一一年三月三〇日までに各地から台北に集合し、三月三一日に台湾総督府蕃務本署に赴き、大津総長、中田課長より「観光中は能く引率官の指揮に随ひ意を留めて観光の目的を達し、帰来の上は他蕃人の指導に努むべく且つ旅行中は衛生に注意すべし[43]」旨の諭達を受けた。またこの際、大津総長より「内地」観光の感想を時々、郷里と蕃務本署に知らせるようにとも告げられたという[44]。新たに編成された蕃務本署体制のもとで試みられた今回の「内地」観光の効果を計る上で、参加者がどのような感想を抱くのかに、出発前から大きな関心が寄せられていたことがわかる。

その後、基隆より「内地」観光に赴いた一行は、四月五日に神戸に到着した後、京都に移動し、翌六日に西本願寺を参詣した[45]。先に述べたように、真宗本願寺派の京都本山（西本願寺）では、宗祖大師六百五十回忌法要が三月と四月の二回にわたって大々的に行われ、全国各地からの団体参拝も企画された。台湾からも約二百名の大団体が組織されたが、その中に今回の「内地」観光団も含まれていたのである[46]。その意味で今回の「内地」観光は、第一章で述べたような台湾原住民の信仰心を利用した布教師による台湾原住民「教化」策の一環として、試みられた側面もあったといえるだろう。

その後、一行は京都の市内各所の見学を行った。九日には、京都の島原競馬場でアメリカ人の飛行家J・C・マースによる飛行機の飛行ショーを見学している[47]。当時、日本

では航空機への関心が高まり、一九〇九年には勅令で臨時軍用気球研究会が設立され、気球や飛行機に関する本格的な研究が行われはじめ、一九一〇年一二月には輸入飛行機による日本初の飛行に成功した[48]。一九一一年二月には所沢に日本初の飛行場が設立されるといった状況の中で、外国人の飛行家が来日し日本各地で飛行ショーを開催したため、多く観客をつめかけた。「内地」観光団が見た京都での飛行ショーはこの一環で開催されたものであるが、飛行ショーについて観光団の一人は次のような感想を述べたと報道されている。

日本の軍隊が生蕃を討つのに従来鉄砲の弾丸や大砲の弾丸を差向けたけれども一向恐ろしいと思はなかつた、然れどア、いふ調子に天空を自由自在に翔け廻る機械が出来ては堪まらない、ブーブーと唸つて居るのは（推進機の音響を指して）空から弾丸を投げて人を殺す機械に違ひない、モー〳〵これからは迚も日本の軍隊に敵対することが出来ぬ、アノ機械が鷹のやうに生蕃地の空を舞うて時々地に降りては人を撮んで上つたら三日五日の間に蕃民は全滅だ[49]

つまり飛行ショーを見て大変驚き、これまでの「討伐」で使用された「鉄砲」や「大砲」は恐ろしいとは思わなかったが、日本がもし飛行機を使用して「生蕃地」を攻撃した場合、自分達は対抗することは到底できず、全滅の恐れもあるとおののいたというのである。第三章でも詳述するが、この第二回「内地」観光、そして同年秋の第三回「内地」観光ともに、飛行機や飛行船について、台湾原住民の驚愕ぶりが繰り返し報道されている。第二回の飛行ショー見学での台湾原住民のこのような反応を見て、第三回では見学先として山田飛行船研究所が選定され、時間をかけての見学スケジュールが計画されたと推測される。当時、日本「内地」においても珍しい最先端の技術を、台湾原住民は「討伐」の記憶や今後の「討伐」の可能性と結びつけて理解したことが、右記の報道からはうかがえる。軍事力の圧倒的な優位性を見せることは、第二回「内地」観光の重要な目的だったと思われ、飛行ショー見学による感想は、そのような目的と合致していたのだと考えられる。

観光団一行は、一二日には大阪に移動し、その日の夜は千日前見物に出かけ、翌一三日には城東練兵場にて大規模

な軍事演習を見学した。二軍に分かれて双方とも「歩兵二箇大隊、砲兵各一箇中隊と騎兵数騎」による実戦さながらの演習で、銃砲のあまりに大きな音に耳を塞いだという。その後は砲兵工廠を訪れたが、ここでは一人一人に弾丸と背くらべさせ武器の大きさを実感させたという。午後は衛戍病院、大阪城、陸軍軍楽隊を見学した[50]。さらに一四日は騎兵第四聯隊を訪問し練武を見学、その後、野砲第四聯隊で三八式速射野砲の操砲術を一行は体験した[51]。このように大阪では連日の軍事関連施設の見学が続いた。ただしこの日の午後は博物場と動物園、天王寺の大梵鐘を見学、その後、大阪朝日新聞社を訪れ印刷工場を見学し新聞が出来上がる速さに一行は感心したという[52]。このように第二回「内地」観光では、軍事関連施設の見学以外に、文化施設や産業関連施設、余興施設などの見学も適宜、組み込まれていた。事実、翌一五日は、新町婦徳会で開催中の浪速踊を見物、さらに一六日は芦辺倶楽部で活動写真を見たという[53]。その後、一行は一九日に大阪を発ち、姫路に立ち寄り、さらに小倉では製紙場、枝光では製鉄所といった産業関連施設などを見学[54]、二四日に門司より笠戸丸に乗船し二七日に台湾に帰郷した[55]。

第三節　台湾帰郷後の状況

「内地」観光参加者は、台湾に帰郷した後、「内地」観光での見聞を出身地域の原住民社会に広めることが求められた。五月九日には、蕃務本署長から関係庁長に対して、「内地」観光の参加者を各庁内の重要な「蕃社」に派遣して、「内地」観光の感想を演説させ、それが聞きに来た聴衆に与えた影響を報告するよう伝達している[56]。その結果、例えば嘉義庁からの参加者であったツオウ族のヤシユグ・ボーユは、五月一九日から五月二六日まで地元のツオウ族の集落四ヶ所を巡回して、各地の駐在所に集められた地域の「有力者」に対して、「内地」観光の感想を演説したという[57]。ヤシユグ・ボーユは、巡査補を勤めており、また日本語にも熟達していたようで、大津総長の求めに応じて、「内地」観光中も滞在先から、葉書に次のような感想を達筆の鉛筆書きで記して、台北の蕃務本署に送ったと報道されている。

四月一日午前十時台北駅より汽車に乗り同く十一時基

隆に着、直にかさど丸に乗船、同く四日門司港に着同港に暫く休み神戸に向ひ翌日着きました。門司も神戸も船が沢山往来し又人も幾人だかわからない程あります。人や船を沢山見てまことに面白あります。私共は皆な無事で神戸に着きましたから御安心願ひます。神戸よりヤシユグボーユ外九名拝　台湾総督府蕃務本署長大津麟平殿[58]

このように日本語の高い運用能力をもち、巡査補や補助教員として、植民地政府の政策の意図や思惑をある程度、理解していたと思われる人物が参加者の多数を占めていたのが、この第二回「内地」観光の特徴だといえよう。

「内地」観光参加者が、「内地」の様子や経験談、感想を郷里やその周辺の「蕃社」で演説して廻ったのは、もちろんヤシユグ・ボーユだけではない。『理蕃誌稿　第三編』には、頭目として参加した桃園庁角板山社のタイモ・ワタン、「ガオガン蕃」テーリック社のユーミン・ロックンに関連して、次のような記載がある。

五月八日ノ頃ヲ期シ乱ヲ作サンコトヲ謀リ前後山蕃全般ニ対シテ蹶起ヲ趣シタルモ、クル、テイリツク、タカサン三社ノ蕃人之ヲ不可トシ、タイモ、ワタン、ユーミン、ロツクン等又各地ヲ巡リテ内地観光ノ感想ヲ演説シ政府ノ抗衡スヘカラサル所以ヲ諭ス所アリシ為其議未タ熟セス、荏苒日ヲ送レリ。総督府ハ報ヲ得テ後藤警視ヲ角板山ニ派シ永田監視区長ト商リテ警ヲ全線ニ伝ヘ専ラ防備ヲ修メシム…（中略）…ブシヤ、ブトノカン社等ノ企テタル陰謀ハ全ク阻止セラレタリ[59]

つまり桃園庁管内で「ガオガン蕃」による反乱の企てがあり、五月初旬に「前後山蕃全般ニ対シテ」蹶起の呼びかけが行われたが、ユーミン・ロックンが頭目を務めるテーリック社をはじめとする三つの「蕃社」は反対し、さらにタイモ・ワタンやユーミン・ロックンが、各地を巡回して「内地」観光の感想を伝え、政府に対抗すべきではないと諭したため企てはまとまらず、時間が経つうちに総督府がその計画を察知し防備を固め反乱の企てを阻止したというのである。

そして台湾総督府蕃務本署は、第二回「内地」観光が、参加者および参加者の郷里やその一帯の原住民社会に対して与えた影響について、「理蕃」政策上の観点から一定の

効果があったと判断し、ほとんど間を置かず、第三回「内地」観光を計画することとなる。

第三章　第三回「内地」観光（一九一一年八月～九月）

第一節　参加者

第三回「内地」観光団は、一九一一年八月一五日に基隆港を出港し九月二三日に台湾に帰るまで一ヶ月以上におよぶ「内地」観光を経験した。第三回の参加者は、桃園、新竹、南投、嘉義、宜蘭、台東、花蓮港各庁からの四三名であり、彼等を蕃務本署警部谷山愛太郎と「関係各庁ヨリ簡抜シタル蕃語ニ通スル巡査」が引率した[60]。参加者の「種族」構成は、「パイワン、タイヤル、ブヌン、ピユマ、アミス」の五種族におよんだという[61]。

参加者選定の経緯は、『台北州理蕃誌（旧宜蘭庁下編）』の記述によると、第二回「内地」観光団が台湾に帰ってから二ヶ月も経たない六月七日に、大津麟平蕃務本署長名で、宜蘭庁に第三回「内地」観光の参加者の選抜依頼があったという。具体的には「各庁下ヨリ蕃人ノ巡査補、教員、雇員、頭目又ハ之ニ準スヘキモノニシテ日本的精神ヲ蕃人ニ普及スルニ足ルヘキ人物約四十名ヲ選定シ内地観光ヲ為サシムル」という計画で、宜蘭庁に対しては「貴庁下ヨリ適当ノモノ八名選抜」の依頼と至急回答が欲しい旨の要請があり、宜蘭庁からは「何レモ他ヲ誘導啓発スルニ足ルヘキ有力者」として羅東支庁より五名、叭哩沙支庁より三名が選ばれた[62]。また各庁に対する照会が、同時期に同様の形で行われたと推測され、結果として嘉義庁から二名、花蓮港庁から三名、台東庁から四名、宜蘭庁から八名、新竹庁から六名、桃園庁から八名、南投庁から一二名と[63]、タイヤル族を中心としたいわゆる「北蕃」が居住する庁から、比較的多くの参加者があった。このような地域毎の参加者割合は、概ね蕃務本署の計画に沿ったものであったと思われる。

具体的な参加者四三名については、「台湾日日新聞」に一九一一年八月八日付で掲載された記事「蕃人内地観光」の中で、「庁名」「蕃社名」「職業」「氏名」「年齢」が紹介されている。その内容は【表二】のとおりである。ただし

【表二】「台湾日日新報」掲載の第三回「内地」観光参加者

庁名	蕃社名	職業	氏名	年齢
嘉義	頂笨仔社	巡査補	タジパンパスヤ	二二
同	ララチ社	農	チヤケヤナアソイ	二〇
花蓮港	針塑社	巡査補	カマヤウ	二四
同	普化社	農	ロオアガ	三八
同	荳蘭社	同	チンライドサク	一八
台東	卑南社	巡査補	イロン	二六
同	脚仔獅社	雇教員	チロカン	二九
同	太麻里社	頭目	テウヨン	五二
同	大鳥萬社	同	カヤマ	三九
宜蘭	上南澳蕃ピヤハウ社	同	ウイランタイヤ	四三
同	同キシヤン社	副土目	ユーカンハヨン	三五
同	下南澳蕃トベラ社	土目	ユーカンラハ	四五
同	同タピヤハン社	同	ハヨンカリツ	三八
同	同	副土目	ユーカンピナン	三二
同	渓頭蕃タボー社	頭目	ロシンナウイ	四三
同	同シキクン社	勢力者	ハヨンピラ	四〇
同	同ピヤナン社	同	ユーミンタツクン	二八
新竹	ジパシー社	土目	クローハイユン	三八
同	同	蕃丁	ユーカイハアイ	三三
同	同	隘勇	ハムラタユーアイ	二九
同	タイナムシイ社	頭目	ツオンターマウ	四五
同	セウナムシイ社	勢力者	タマオマーヤ	五〇
同	サフロク社	頭目	ハユンセエツト	不詳
桃園	角板山社	頭目	タイモワタン	三九
同	ラハウ社	副頭目	セツヤンユツ	五〇
同	竹頭角社	頭目の長男	ホラノカン	三〇
同	テーリツク社	頭目	ユーミンロツクン	三〇
同	タカサン社	同	パツトシヤツ	四五
同	クル社	同	マウチノンゲ	四〇
同	後山蕃ギヘン社	同	タンタメ	三〇
同	馬武督	同	ヤポノカン	三九
南投	霧社ホーゴー社	農	ポポクノーカン	二八
同	同	同	アウイナピン	二五
同	トロツクサート社	同	ピーロポーラン	三八
同	同	同	ハロンパツサウ	三一
同	萬大社シメウル社	同	ウカンロフン	三五
同	同ツゲウス社	同	テツポンマホン	三〇
同	タウツカールツクタヤ社	同	ウミンワタン	三九
同	同	同	トツキリロタン	三六
同	楠仔脚萬社	巡査補	灌叭士良	二六
同	和社	農	ルルナナパスラ	三二
同	巒蕃インガン社	同	ツケルマンイピ	三七
同	蚊蕃タマロー社	同	タシカパンウーラン	三九

※「台湾日日新報」1911 年 8 月 8 日掲載記事「蕃人内地観光」より筆者が作成。

観光団の様子を伝える「内地」の新聞記事で、繰り返し登場する父親とともに参加した「七歳の参加者[64]」の記載がないなど、この「蕃人内地観光」という記事については、その内容に不確実な点があり、また観光団出発の一週間前の記事であるため、出発直前に参加者の変更があった可能性もあるが、参加者の全体的な状況を知る上で参考になると考え、【表二】として掲げた[65]。

ここからは第二回「内地」観光に参加した角板山社頭目タイモ・ワタンとテーリック社頭目ユーミン・ロックンが、第二回に続いて今回も参加していることがわかる。またこの記事から推測される参加者の平均年齢はおおよそ三五歳と、基本的には壮年層の「勢力者」中心の構成だったといえよう。さらに異なる「種族」間では言葉が通じなかったため、「内地」観光中の宿舎は多くの場合、「種族」ごとの部屋割りとなり、また日本語が話せる数名以外は、訪問先において引率者が適宜、通訳することとなった[66]。

第二節　「内地」観光の内容

第三回「内地」観光の旅程は、門司から神戸、大阪、京都、名古屋、東京、横須賀、岡山、広島、小倉を巡るものであり、京都以西の都市を訪問した第二回とは対照的に、東京での滞在が八月二八日から九月六日と一週間以上におよんだ。また見学の中心は軍事関連施設であり、大阪、京都、名古屋、東京、横須賀、岡山、広島、小倉と訪問先となったほとんどの都市で、各地の師団や砲兵工廠などの見学が組み込まれている。今回の「内地」観光については、台湾発行の日本語新聞である「台湾日日新報」をはじめ、「朝日新聞」や「都新聞」、「萬朝報」、「新愛知」などの日本「内地」の新聞にも大々的に報道されている。これらを手がかりに、その具体像について追ってみよう。

「内地」観光団一行は、まず八月一九日に神戸に上陸し、湊川神社の参拝を経て、その日の内に汽車で大阪に移動した。大阪の梅田駅到着時は、大勢の見物人が押しかけたという[67]。翌二〇日は大阪で島田硝子製造所、大阪製氷所、新

田製革所といった産業関連施設を見学[68]。翌二一日には大阪城址、砲兵工廠、高島屋呉服店などを訪問[69]、翌日には大阪を発って京都に到着、妙心寺で仏事に参加し、その後、北野天満宮を訪れたようである[70]。

八月二三日からは軍事関連施設の本格的な見学が始まる。この日は、京都の第十六師団を訪問し、歩兵二十聯隊の実弾演習などを見学、大砲の音に驚いたという。そして引率の谷山警部が兵器支廠の前で「お前等に之より内地の精鋭なる武器を見せ遣るべし」というと一行は「何卒大砲や鉄砲で脅すのはお許し下されと頭を抱へたる」と報道されている[71]。しかし軍事関連施設の見学は、これ以降もさらに繰り返されていくこととなる。

八月二五日に京都より汽車で名古屋に到着。ここでも多数の見物人が押し寄せた[72]。翌二六日には名古屋の第三師団を訪問、歩兵第六聯隊の教練を見学[73]、午後には熱田神宮や熱田車両会社などを見学、二七日には安城農林学校などを見学[74]。八月二八日には朝名古屋を発って、夕方には東京の新橋に到着した。ここで引率の谷山警部の談話が出されたようで、複数の新聞にその内容が報道されている。それによると、「連れて来た目的ハ、第一に武威を示して『戦つた所で到底もかなはない』といふ事を悟らせるのであるから、到る処軍隊を見せてゐる」という[75]。すでに東京に到着した段階で、軍事関連施設の見学について食傷気味であった台湾原住民に対して、この目的に沿った形で、東京滞在中はさらに集中的な見学が行われていくことになる。

八月二九日の一日休息を挟み、三〇日には第一師団を訪問し、歩兵三聯隊の銃剣術の実演を見学、さらに歩兵一聯隊の大隊教練を見せられたが、その最後に観光団は一列に並ばされ、彼等の「正面四五間前まで」、兵士が銃剣を掲げて突進して来たため、彼等は恐怖の表情を浮かべたという。昼食後、今度は小石川砲兵工廠に赴き、銃器が間断なく製造されている様子を見学。さらに速射機関砲の発射の実演も行われた[76]。翌三一日は板橋の工兵大隊を訪問。板橋停車場から軍用自動車に分乗して大隊に到着後、練兵場でまず爆破実演を見学、その後、地雷の実演、さらに手投げ爆弾の実演を見学。昼食後は兵器庫にて、爆破実演で大木五本が倒れる様を見せられたという。その後は王子砲兵工廠に行き銃砲製造所で銃弾が次々と製造される様子を見学

した[77]。砲兵工廠の見学は前日に引き続き行われており、大量の兵器が製造される様子を見せることは、今回の「内地」観光の重要点の一つだったと思われる。

九月一日は、まず近衛第二聯隊を訪問。ここでも教練見学が組み込まれており、一個中隊が見学する観光団の方向に一斉射撃する様子を見せられた。さらに前々日の歩兵三聯隊訪問時にも行われた銃剣術の実演があり、加えて近衛軍楽隊が音楽を吹奏しながら観光団の周囲を廻ったという。次に炊事場で大人数分の食事が出来上がるのを見学。さらに騎兵聯隊の教練も見学した。この後は市ヶ谷士官学校と中央幼年学校も訪問先に組み込まれていた[78]。翌二日は、深川越中島の糧秣本廠を訪れ、パン製造所などを見学した[79]。このように大量のパンや缶詰が作られ、貯蔵されている様子を見せることは、前日の近衛第二聯隊訪問時の炊事場見学も含めて、戦争に際して兵糧が潤沢であることを示す意図があったと思われる。

九月二日の午後は軍事関連施設の訪問は一旦終えて、三越呉服店と報知社を訪問[80]。翌三日も日曜日だということもあって、「内地」観光団一行は、上野の動物園や博物館を見学、さらに浅草に赴き、活動写真などを見たという。ただし三日の朝は、飛行船見学のため、大崎の山田飛行船研究所を訪れている。ここではテーリック社頭目のユーミン・ロックンが代表して実際に飛行船に乗船し、五〇メートル程上昇した様子を見て、一行は大変驚いたという[81]。さらに飛行船から下りたユーミン・ロックンは「俺ハ生れてから斯んな吃驚したことハない。日本人ハ神様以上だ[82]」と語り、「海も見える山も見える此麼物を蕃界に持つて来られて頭の上から先日の工兵隊で見た擲弾を投げられては堪まらない。何んな所に匿れても駄目だ[83]」と語ったと報道されている。ユーミン・ロックンは、第二回の「内地」観光では飛行機の飛行ショーを見ており、今回は見るだけでなく実際に飛行船に乗って、上空に五〇メートルに浮上するという経験をしたことになる。そしてそこで見えた光景を、自分達の故郷への「討伐」の可能性と結びつけ、驚きと強い懸念を示したといえよう。

九月四日はまた軍事関連施設の見学に戻り、横須賀鎮守府を訪問。日露戦争の戦利品である軍艦相模を見学、その後、海軍工廠にて機械工場や木工工場、錬鉄工場などを見

学した。今回の「内地」観光団にとって、海軍関連施設の訪問は初めてだったが、砲兵工廠の見学を繰り返し行っていたため、工場見学ではあまり珍しがらなかったという。[84]この頃の観光団の様子について、「東京朝日新聞」では次のように報道されている。

上京以来八日間連日跣足で方々を引き廻され兵隊の突貫に寿命を縮め、飛行船に度肝を抜かれ、人波に揉まれてはいくら蕃君でも堪まらない、心身共に疲れ切つてもう何処を見なくてもいゝから早く帰らして呉れと引率官に哀願する様な始末故、今日は一日宿舎に休養して六日退京京都岡山を経て下関から乗船愈帰台の途に就くといふ。[85]

この記事からは、外出のたびに大勢の見物人に取り囲まれ好奇の眼にさらされる状況や、連日の軍事関連施設の見学に、一行が疲れ果てて辟易としている様子がうかがえる。この記事のとおり九月五日は一日、休息日に当てられ、翌六日は拓殖局を訪問し、元田肇拓殖局総裁や内田嘉吉台湾総督府民政長官に面会。午後には東京を発って、新橋駅から列車で京都に向かうこととなるが、新橋駅には見送り見物人がプラットフォームまで殺到し、発売した入場券は一二〇〇枚以上になったという。[86]

その後、一行は京都を経て、九月一〇日は岡山にて工業学校や物産陳列所、後楽園を見学。翌一一日は練兵場にて砲兵の火砲射撃や騎兵一箇聯隊の教練、歩兵一聯隊の軍旗敬礼式、兵士の銃鎗などを見学、午後は岡山城の天守閣に登り、さらに小学校を見学したという。[87]その後、一行は広島、小倉を訪問。ここでも重砲兵聯隊や呉鎮守府、小倉師団などの軍事関連施設、マッチ製造会社や製紙会社、八幡製鉄所などの産業関連施設を見学し、九月二〇日に門司から台湾に向かい二三日に台湾に帰郷した。[88]

第三節　「内地」観光への反応と台湾帰郷後の状況

このような「内地」観光を経験した台湾原住民は、どのような感想をもったのだろうか。

今回の「内地」観光に関しても、台湾総督府は「内地」観光での見聞やその感想を、参加者が帰郷後に周辺の原住民社会に広めることを期待しており、所轄庁長に対して彼

等の帰郷後の感想を報告するよう求めた。それをまとめたものが「明治四十四年九月第二回「内地」観光蕃人感想」と題されて、「内地」観光で協力を得た海軍次官宛てに送られている。[89] また「台湾日日新報」にも感想が掲載されている。さらに「内地」の新聞社の新聞記事にも、断片的ではあるが、彼等の感想が記されている。これらを手がかりに右記の問題について考察してみよう。

まず出発までの状況について、かなりの抵抗があったことがわかる。参加者の中には、次のような思いを述べた者がいたという。これまでの状況として原住民同士でも複雑な敵対関係がある中で、「自分等ハ社ヲ出ツルコト一歩ナレバ総テ敵地」という認識のもとで生活しているが、今回、庁長や支庁長より見聞を広めるために是非「内地」観光をするよう強く勧誘された。自分達はすでに帰順しており、以前の行いは不問に付された筈だが、日本に誘い出して殺害されるのではないかと疑問を抱いた。そのようなことはないとのことだったので半信半疑で承諾したが、親子兄弟とはこれで生き別れる思いで出発したと。[90] このような警戒感のもとで始まった「内地」観光であったが、「内地」への出発直前に台北にて佐久間左馬太総督から「何レモ蕃社ノ土目及勢力者ナルヲ以テ一人ハ蕃丁数十人ニ相当スルモノト認メ特ニ観光ヲ命シタルナレバ其得タル所ヲ帰社ノ上蕃社一同ノ者ヘ伝達ス可シ且ツ旅行中…（中略）…風土慣レザレバ衛生上ニハ十分注意シ身体ヲ大切ニシ引率官ノ命ヲ守リ観光ノ目的ヲ達ス可シ」[91] との訓示を受けて、「内地」に到っても殺害されることはないだろうと安堵し、「内地」に旅立ったという。このような台湾原住民参加者の中にあった疑念について、実施者側も認識していたようだ。例えば引率警察官の言葉として、参加者が病気になることへの警戒感が次のように報道されている。

観光中一人の病死者でも出来したものなら将来理蕃政策に及ぼす不利益が伴ふのであるから其心配は一通りでなかった[92]

なぜ万が一、病死者が出た場合、今後の政策実施の障害になると考えられたのか。その理由として、例え病死であったとしても、「毒を盛て殺したのだ」と曲解されてしまうだろうという畏れがあったという。[93]

しかし実際に「内地」にやってくると「日本人ハ到処自

分等一行ヲ歓迎優待シ物品ヲ恵与シ途中一人ノ罵詈スル者ナク其ノ親切ニハ実ニ感謝スルノ外ナシ」[94]と予想外の歓待に感謝する感想や、日本の食物の豊かさと美味しさを称える感想、さらに日本の国土の広さを実感したという感想や日本人の多さに「恰モ蕃地ノ木葉ノ如ク又蟻ノ如ク実ニ形容スルニ言ナキ如キナリ」[95]と大変驚いたという感想が寄せられたという。また工場見学ではその技術の高さに感嘆する声や、山を掘ってトンネルや水路を作る技術に驚嘆する声、さらに今回初めて乗車した自動車に大変驚き、台湾でも乗車経験のある汽車や、電車と比較して「汽車電車ノ如ク地上空中ニ何等ノ設備ナク眼モ有セスシテ自由ニ地上ヲ駆ケ廻ルナリ。而シテ車ノ前方ニ鼻ノ如キ長キモノ突出シ其ノ鼻ヲ以テ道ノ左右ヲ探リ時々大犬ノ吐ユルカ如キ声ヲ発シテ疾走ス。自分等モ数回之ニ乗リタルカ多分中ニ数頭ノ犬ヲ入レ置キ之ヲシテ牽カシムルモノナラント思ヒタリ」[96]と彼等にとって、なかなか理解しがたい状況を身近な知識を動員して解釈しようとする感想もあったようだ。

ただし先述の「明治四十四年九月第二回「内地」観光蕃人感想」や、各種の新聞報道において、最も多く紹介されているのは軍事関連の感想である。[97]例えば、八月三〇日の東京での第一師団訪問の際、歩兵一聯隊の教練において、兵士が観光団目がけて銃剣を掲げて突進してくる場面があり、一行が恐怖の表情を浮かべたことはすでに述べたが、この日は銃鎗術の試合見物もスケジュールに組み込まれており、そこで観光団に対して道具を貸すから試合をしてごらんと誘ったという。そしてその時の反応について、次のように報道されている。

ユーミンロツコン先生頭を振つて、イヤ私共がやつたら直ぐ突き殺されて仕舞ます、昨年も私共の仲間が二人突き殺されたのを見たが腹から背中まで貫かれてゐたと身振ひをする[98]

つまりテーリック社頭目ユーミン・ロックンが、自分達がやったら直ぐに殺されてしまうといって断るわけだが、彼はそのことを昨年、自分の仲間が二人殺された場面を思い出して答えていることがわかる。第一章および第二章で述べたように、テーリック社を含めた「ガオガン蕃」は、今回の「内地」観光が行われた前年、「討伐」作戦の対象となっており、「内地」観光において見学を強いられた軍隊の様々

な実演は、その記憶と結びつけて理解されていたといえる。数年前の「討伐」の記憶と、目の前で展開されている軍隊の演習を、結びつけて捉えた感想は、他の参加者からも語られた。八月三一日の工兵大隊訪問では、すでに述べたように、一行は爆破実演、地雷の実演、手投げ爆弾の実演などを見学することになるが、その時の様子について「火薬の偉大な効力に膽を潰し「日本人は実に偉い何事でも知つてる。最う自分等は決して抵抗はしないから何うぞこの様に恐いものを見せて下さるな」とユーミン君が云ふとウイラン頭目は「日本へ来て一番恐ろしかつたのは昨日の突貫でその次が今日の地雷だ。此の地雷には仲間の者が幾人殺されたか解らない。体が粉微塵になつて仕舞ふから堪らない」と云ふ[99]」と報道されている。ユーミン・ロックンが、これからは決して抵抗しないから恐怖心を抱かせるような実演見学は止めてくれと懇願しているのも先に述べた文脈で把握すべきだと考えるが、この記事の中で登場する「ウイラン頭目」とは、宜蘭庁「上南澳蕃」ピヤハウ社頭目のウイラン・タイヤのことだと思われる。彼は地雷が爆発する様を見て、自分の地元の仲間が殺された場面と結びつけて恐怖を感じているのだ。第一章で述べたように「南澳蕃」に対しては一九〇八年に「宜蘭庁大南澳方面隘勇線前進」作戦が実施されており[100]、ピヤハウ社を含めた「上南澳蕃全社」は一九〇九年一月に仮帰順した[101]。ただその後も、この地域の台湾原住民が隘勇線附近に設置された地雷によって爆死したり、高圧電流線に触れて感電死する事態が相次いでおり、ウイラン・タイヤの実弟も感電死したという[102]。工兵大隊見学の際に語られた「地雷には仲間の者が幾人殺されたか解らない」というウイラン・タイヤの発言は、直近数年の実体験を背負って語られたといえよう[103]。

さらに砲兵工廠等で武器が大量に製造される様子を見せることは、今回の「内地」観光の重要点だったことはすでに述べたが、その事に関連して次のような感想が述べられたという。

日本ハ到処銃器弾薬ノ製造所アリ、無数ノ職工之ガ製作ニ従事シ中ニハ婦人ニシテ其製造ニ従事スル者アリ、其技術ノ巧妙ナル到底自分等ノ及ブ所ニアラズ、斯ク毎日数千ノ銃器ト数万ノ弾薬トヲ製造シ、結局之ヲ如何ニスル積ナルヤ自分等ハ其了解ニ苦シム、自分

等ガ帰順ノ際提供シタル銃器弾薬ハ総テ抛棄セラル、ト聞キタルモ必ス日本軍ガ使用スルモノナラント疑ヒ居リタルニ、此ノ如キ精鋭ナル銃器ヲ多数製造スルヲ見レバ自分等ノ提供シタル不完全ナル銃器ヲ使用スル筈ナシト初メテ覚リタリ[104]

つまり銃器弾薬の製造の巧みさと速さに驚き、その結果として製造される量に圧倒されたという感想が示された上で、「討伐」の結果もしくは「討伐」を避けるために帰順した際の記憶と結びつけて彼等の考えが述べられているのである。台湾原住民が帰順の意思を示した際に、台湾総督府が課した帰順条件の最も重要なものの一つは、所有する銃器弾薬を提出することであった。狩猟を行う台湾原住民にとって銃器弾薬は生活の糧を得る重要な道具でもあり、提出への抵抗は大きかったが、多くの場合、「討伐」か銃器弾薬の提出かを迫られるような状況のもとで帰順は行われた。「銃器ヲ生命ニ次ク宝トナス[105]」原住民にとって、提出させられた銃器弾薬がどのように扱われるのかは大きな関心事だったと思われるが、目の前で次々と製造される銃器弾薬を見て、彼等が提出した銃器弾薬は「投擲」されたという総督府側の説明を初めて受け入れたというのである。また目の前で大量に製造される銃器弾薬の使い道について、結局どうするつもりか理解に苦しむと彼等が疑念を抱いていることも、「討伐」の記憶もしくは「討伐」の予感との関連で理解すべきだと思われる。このように第三回「内地」観光は、まさに台湾原住民に対する「討伐」作戦が数年前から現在進行形で実施されているという状況のもと、「討伐」を経験し帰順した台湾原住民、もしくは「討伐」の可能性があった、もしくは警戒対象である地域の台湾原住民を主な参加者として行われたものであり、その特徴は彼等の感想に色濃く反映していたともいえる。

実は、台湾原住民を迎えた「内地」の人々にとっても、台湾の山の中で数年前から行われている「討伐」作戦は無関係ではなかった。「内地」観光団について、訪問先の各所で多くの見物人が押し寄せたことは、本章第二節で繰り返し述べたが、その理由は阿部純一郎が指摘するように、今回の観光団は原住民の伝統的な「種族」の服装で観光をしており「内地」の人々のエキゾチックな関心を惹いたこと、[106]さらに四〇名以上と大勢が集団で行動したため目立っ

たことが主な理由であったと思われるが、それに加えて、名古屋では「内地」観光団に注目する理由として「新愛知」の記者が次のように語っている。

▲大評判の生蕃　とは鬼か人か如何な怖ろしい者だらうと珍らしい者見たさに集つた見物の数は夥しい…（中略）…何分当地には初めての珍客、殊に昨年度の生蕃討伐隊に参加した台湾歩兵第一聯隊第一大隊には愛知、三重、岐阜、三県下の壮丁が沢山入隊した。殊に我が名古屋市出身者では三十有余名の内三名の上等兵を宜蘭蕃界シナレク山中腹の大戦闘で無惨にも敵蕃の手に殺ろ（ママ）した。昨年七月十二日から十四日に亘る台湾歩兵第一聯隊の松沢中隊及び山井中隊の悪戦苦闘が即ち夫れで、両中隊合して約四十名の死傷者を出したのだ。其当時敵蕃ガオガン一方の旗頭として強暴獰悪其猛威を逞うして散々我々を苦めたテーリック社の頭目ユーメンロック（三十六）が一行に加つて居るのは、当時の戦闘に参加した一兵卒の記者に取つては頗る珍とすべき事で、当時の光景を偲ぶべく親しくユーメンロックと物語りをした。[107]

つまり同年四月の第二回「内地」観光は、訪問先が京都以西だったため、今回の観光団が名古屋では珍しかったことに加えて、第一章で述べた一九一〇年の「ガオガン蕃方面隘勇線前進」作戦に、この地域からも多数従事しており、さらにその作戦に実際に一兵卒として参加した記者にとっては、当時「敵蕃」の「旗頭」であったテーリック社頭目ユーミン・ロックンが今回の観光団に参加していることは、奇遇であり大いに興味が引かれることであったというのである。一見すると一人の記者の個人的な経験に基づく関心のようにも見えるが、台湾原住民に対する「討伐」作戦については、討伐隊に対する慰問袋募集の呼びかけが、愛国婦人会によって愛知県内の村々でも行われるなど、[108]「討伐」作戦への関心の裾野は広がっていたと思われる。おそらくこのような関心の状況は愛知県のみに限られるものではなく、日本「内地」に一定程度、共通する状況だったのではないかという見通しを持っている。その意味でも、第三回「内地」観光は、蕃務本署体制下で、「討伐」服従化作戦が本格的に展開されている状況のもとで実施された特徴をもつものだったのである。

さらに今回の「内地」観光団に加わった原住民が抱いた感想と、それが地域社会に与えた影響に関する興味深い記録が、『台北州理蕃誌』に残されている。本章の最後にそれを紹介しよう。

宜蘭庁叭哩沙支庁下の「蕃界」においては、一九一一年三月にピヤハウ社の「蕃丁」が日本人の川上巡査を殺害する事件が起こった。この事件については、四月一六日にピヤハウ社頭目ウイラン・タイヤが叭哩沙支庁長に謝罪し、物品を提供することで治まったが、八月にはバボカイカイ社の「蕃丁」が佐伯巡査を殺害する事件が起こった。そこで同年一〇月二三日・二四日の両日、佐伯巡査殺害事件への対応策を協議するため、「上南澳蕃」と「下南澳蕃」の頭目副頭目がクバボー社に参集し、キンヤン社駐在巡査とクムヤウ社駐在巡査立ち会いのもと、善後策を話し合っていたところ、クバボー社頭目は謝罪が受け入れられず「討伐」を受けるならば反抗すべきだと仄めかし、キルモアン社頭目も提供を命じられた謝罪品が過重で不公平だと反発した。[109] それに対して、今回の「内地」観光を経験したキンヤン社副頭目やトベラ社副頭目が諫め、さらに同じく「内地」観光者であったピヤハウ社頭目ウイラン・タイヤが次のように語ったという。

吾等同族中ニハ我社ヲ知テ他ヲ知ラサルノ結果、動モスレハ反抗的言辞ヲ弄セルモノアリ。其ハ内地観光ヲ為ササルカ為ナリ。最モ自分ニ於テモ内地観光以前ニ在リテハ、如何ニ日本人ヨリ内地ノ広大ナル銃器弾薬ノ夥多ナルコトヲ説明セラレテモ之ヲ信セサリシカ、過般ノ観光ニ因リ初メテ軍隊ノ如キ兵器ノ如キ説明以上ニ多数ナリシヲ現認シ、殊ニ銃器製造ノ敏速ナルコト到底言語ノ尽スヘキニ非ス。多数ノ兵士カ幾年間戦闘ニ従事スルモ銃器弾薬ノ欠乏ヲ来スヘキ憂ナシ。反之吾等ノ銃器弾薬ハ瞬間ニ算シ得ラルル少数ナルヲ以テ、設令地ノ険ニ拠リ或ハ一時ノ勝利ヲ得ルコトアリトモ必ス敗亡スルハ火ヲ観ヨリ瞭カナリ。現ニ我等観光中霧社蕃人ヨリ我南澳蕃社ノ人口及銃器弾薬ノ概数ヲ尋ネラレタルニ因リ現状ノママヲ答ヘタリ。彼等ハ云フ吾等霧社蕃ハ従来壮丁及銃器弾薬ノ多キト壮丁ノ勇敢ナルトニ自負シ居タル結果自然官命ニ抗拒シ討伐セラルルニ至リ、遂ニ一勝ヲモ得スシテ銃器弾薬ノ全

部ヲ提供シ帰順ヲ哀請スルノ已ムヲ得サルニ至リ今更昔日不得心悔悟ニ勝ヘス。故ニ吾霧社ノ十分一ニモ当ラサル汝等南澳蕃ハ吾等ノ覆轍ヲ踏ムカ如キコトナク、克ク帰順ノ実ヲ挙ケ討伐セラルルカ如キコトナキ様注意セヨト忠告セラレタリ。其他各方面ノ蕃人ニ対シテモ今後日本ニ対スル意向ヲ聞合セタルニ何レモ誠意帰順ノ利ナルヲ答ヘラレタリ。斯ル状態ナルヲ以テ霧社蕃同様ノ運命ニ遭遇セサル以前ニ於テ速ニ謝罪命令ヲ実行シ以テ蕃社ノ安全ヲ図ルヘシト。[110]

つまり、「内地」観光に行く前は日本「内地」に関する様々な説明を聞いても信じられなかったが、今回、実際に「内地」に行ってみて、軍隊や兵器が説明以上に多数であることを知り、さらに銃器の製造の速度に驚いたという。そのような速度で生産される日本の銃器弾薬の状況に比べて、自分達の銃器弾薬の量はあまりにも少なく、このような武器の状況では日本に反抗しても到底勝てないと説明するのである。さらに「内地」観光中に霧社からの参加者より、「討伐」を受けた際の経験を聞き、さらに同じ轍を踏まないように忠告されたことが語られている。第一章で述べたように霧社については、一九一〇年一二月から一九一一年三月まで「霧社方面討伐」作戦が実施されている。今回の「内地」観光には、「霧社ホーゴー社」や「トロツクサート社」からも参加者が選ばれているが（【表二】参照）、「討伐」作戦から半年も経たない段階で霧社の人々は「内地」観光に旅立ったこととなり、生々しい「討伐」の記憶の中での「内地」観光だったと思われる。このように第三回「内地」観光は、「討伐」を受けた際の具体的な情報が、他の「蕃社」に伝えられる機会でもあったのだ。大規模な「討伐」作戦が現在進行形で実施されている最中に行われた第三回「内地」観光は、このような形でも、台湾原住民社会に影響を及ぼしたといえるだろう。

おわりに

これまでの考察を踏まえて、一九一一年に実施された二回の「内地」観光は、次のようにまとめることができるだろう。一八九七年に実施された第一回「内地」観光から、一〇年以上たって行われた第二回「内地」観光は、一九〇

九年一〇月に整えられた蕃務本署体制のもと、台湾原住民政策が「北蕃」に対する「討伐」服従化の断行に舵が切られるなかで、このような状況下での台湾原住民に対する「内地」観光の効果について、試験的に計ることを目的として実施されたといえる。そのため参加者についても、多くの「種族」を対象とし、かつ一部の「勢力者」と多数の「先覚者」という複合的な状況であり、また台湾原住民の信仰心に着目し宗教者によって教化を進めるといった教化策の一環という側面と、軍隊の演習や武器製造の豊かさを見せることで彼等の抵抗心を削ぐといった側面が混在していた。しかしながら、参加者とりわけ「勢力者」の選定には、数年以内に「討伐」を受けたもしくは「討伐」の可能性のあった「蕃社」の有力者が選ばれており、この点で次の第三回を準備するものだったといえる。

第二回「内地」観光からあまり間を置かずに実施された第三回は、五つの「種族」から参加者が構成されているものの、その比重は「北蕃」つまりタイヤル族に置かれていた。

そして参加した「北蕃」の多くは、「南澳蕃」「霧社蕃」「ガオガン蕃」など、数年以内に「討伐」の対象となった、あるいは「討伐」の可能性があった「蕃社」から、その地域に影響力をもつ「勢力者」として選ばれており、「討伐」の記憶が鮮明な段階で、日本「内地」において、繰り返し軍事関連施設を見学させることによって、軍事力の差を圧倒的な差として認識させることに主眼が置かれたものであったといえる。

一九一一年当時、蕃務総長であった大津麟平はその著書『理蕃策原義』の中で、台湾原住民に対する観光政策の有効性について、原住民の「驕慢心ヲ降服スルハ観光ヲ以テ最モ軽便トス」と述べた上で、「日本内地ニ誘致」して軍隊をはじめとして日本の状況を実見させれば、彼等の「驕慢心ハ忽チ変シテ恐怖ノ念」となり、その後は濫りに「兇行」を行わなくなり、さらにその恐怖心が他に伝わり「他ノ兇行ヲ制止スルノ原動力」となるとする。その観点から最も「観光」の必要性があるのは「未帰順蕃」であるが彼等を「観光」させることは容易ではなく、また完全に帰順した者もむしろ「観光」の必要性はないので、「半帰順ノ状態ニアル蕃人ヲ勧誘シテ観光セシメテ以テ安心ヲ与ヘ、

之レヲ未帰順蕃ニ波及シテ其ノ猜疑心ヲ柔ケ、遂ニ勧誘ニ応セシムルニ至ルヘキナリ」と主張している[111]。第三回の「北蕃」の人選は、このような考えに沿ったものであったともいえよう。

ただし第三回「内地」観光の結果、どのような影響が台湾原住民社会にもたらされたかは、蕃務本署の思惑よりも、より複雑だったと思われる。例えば第三章第三節の最後で、「上南澳蕃」と「下南澳蕃」の第三回「内地」観光参加者が、「内地」から故郷に帰った一ヶ月後の集まりの際、語ったとされる発言について紹介したが、実はその後、この一帯は情勢が「不穏」となり、翌一九一二年二月には各「蕃社」に置かれた駐在所から、危険を避けるため駐在所員が引き上げるという事態になったという[112]。「帰順」と「抵抗」の間で揺れ動くという意味で、「南澳蕃」はまさに「半帰順ノ状態」であったともいえるが、一九一二年には「討伐」服従化作戦がさらに進行し、同年に実施された第四回「内地」観光、第五回「内地」観光においては、第二次「五箇年計画理蕃事業」の主な対象である「北蕃」に参加者が絞り込まれることとなる。その際、政策としての「内地」観光のあり方は、どのように変化するのだろうか。この点については稿を改めて論じたい。

※本稿は、科学研究費補助金・基盤研究（C）［課題番号：19K00985］による研究成果の一部である。

1　台湾において台湾先住民の公式呼称は、一九九四年の「中華民国憲法」の改正により、「原住民」（のちに「原住民族」）となった。この呼称は、台湾先住民の権利向上運動の中で先住民族の自称として唱えられた側面もある。このような点に鑑み、本稿では台湾の先住民を指す呼称として「原住民」を使用する。また「勢力者」とは「頭目」など台湾原住民社会の中で旧来から社会的影響力をもつ人々を指し、「先覚者」とはなんらかの形で日本の教育を受けた新しいエリートを指している。なお「蕃人」「蕃地」「蕃社」などの用語は、資料用語として括弧付きで使用する。

2　上野史朗「植民地統治初期における撫墾署と台湾原住

民との関わりについて―台湾総督府文書の分析を中心に―」（『マイノリティの孤立性と孤高性』、中京大学社会科学研究所、二〇〇二年）、傅琪胎「誘導「嚮往文明」之旅：1897年台灣「蕃人内地觀光」」（『文化越界』第三期、二〇一〇年）、松田京子「「内地」観光という統治技法―一八九七年の台湾原住民の「内地」観光をめぐって―」（『アカデミア 人文・自然科学編』第五号、二〇一三年）など。

3　鄭政誠『認識他者的天空―日治時期台湾原住民的観光行旅―』（博揚文化〈廬州〉、二〇〇五年）など。

4　阿部純一郎『〈移動〉と〈比較〉の日本帝国史―統治技術としての観光・博覧会・フィールドワーク―』（新曜社、二〇一四年）、主に第六章、第七章。

5　松田、前掲「「内地」観光という統治技法」および松田京子『帝国の思考―日本「帝国」と台湾原住民―』（有志舎、二〇一四年）、主に第二章参照。

6　なお第六回は、一九一八年四月から五月にかけて、主に「勢力者」を中心に六〇名の参加者で実施されており、「五箇年計画理蕃事業」後の台湾原住民社会の引き締め効果をねらったものであり、第二期の派生的なものと考えられる。まだ一九二五年に第七回が実施されているが、他の「内地」観光とは異なり、台湾先住民のみの野球チーム「能高団」が、日本各地の高校チームと練習試合のために遠征したものであり、異色を放つ回だといえる（松田、前掲『帝国の思想』、第二章参照）。

7　松田、前掲『帝国の思考』、主に第四章、第六章参照。

8　伊能嘉矩編『理蕃誌稿　第二編』（台湾総督府警察本署、一九一八年）、四八一～四八二頁。なお本稿の執筆に際しては、一九八九年に青史社から刊行された復刻版『理蕃誌稿　第一巻』を使用した。以下、同様。

9　同右、四八一頁。なお引用資料の旧字体は新字体に改め、適宜、句読点を補った。以下、同様。

10　清朝時代の対原住民防備策である「隘」に由来するものであり、「隘路」と呼ばれる柵をつくり、要所要所に「隘寮」と呼ばれる歩哨を設け、そこに警備員である「隘勇」を配置した（松田、前掲『帝国の思想』、第六章参照）。

11　藤井志津枝『理蕃―日本治理台湾的計策―』（文映堂〈台北〉、一九九七年）。

12 伊能編、前掲『理蕃誌稿　第二編』、五五五～五五六頁。
13 同右、六二八～六二九頁。
14 猪口安喜編『理蕃誌稿　第三編』（台湾総督府警務局、一九二一年）、一八頁。なお本稿の執筆に際しては、一九八九年に青史社から刊行された復刻版『理蕃誌稿　第二巻』を使用した。以下、同様。
15 同右、一九～二〇頁
16 同右、一八頁。
17 同右、六頁。
18 同右、五四七～六八〇頁および松田、前掲『帝国の思考』第六章参照。
19 猪口編、前掲『理蕃誌稿　第三編』、六八〇～七〇〇頁。
20 同右、六八七頁。
21 同右、六九四～六九八頁
22 同右、六九八～七〇〇頁。
23 同右、七〇二～七一九頁。
24 同右、七一九～七四一頁。
25 同右、七四一～七六三頁。
26 同右、七六三～七七四頁。
27 同右、一九四頁。
28 同右、八一～八三頁。および台湾開教教務所臨時編集部編『真宗本派本願寺台湾開教史』（真宗本派本願寺台湾別院、一九三五年）、一〇一～一〇四頁。なお本稿の執筆に際しては、編集復刻版『仏教植民地布教史資料集成〈台湾編〉第4巻』（三進社、二〇一六年）に収録されたものを使用した。以下、同様。
29 大津麟平『理蕃策原義』（大津麟平、一九一四年）、三三頁。
30 猪口編、前掲『理蕃誌稿　第三編』、一八三頁。
31 台湾開教教務所臨時編集部編、前掲『真宗本派本願寺台湾開教史』、一〇三頁。
32 猪口編、前掲『理蕃誌稿　第三編』、一九五～一九八頁。
33 同右および「台湾日日新報」一九一一年三月二六日。
34 猪口編、前掲『理蕃誌稿　第三編』、一九六頁。
35 同右および「台湾日日新報」一九一一年四月二日。
36 「台湾日日新報」一九一一年三月二九日。
37 なお年齢については「台湾日日新報」一九一一年三月二九日掲載記事の記述によっているが、この記事では三

三歳とされているユーミン・ロックンは、第三章で言及する「台湾日日新聞」同年八月八日掲載記事では三〇歳、「新愛知」八月二九日掲載記事では三六歳と報道されており、不確実な部分もあるが、おおよその目安とはなるため参考として【表一】に掲載した。

38 「大阪朝日新聞」一九一一年四月一三日。

39 猪口編、前掲『理蕃誌稿　第三編』、八三～八四頁。

40 同右、五六〇～六四八頁。

41 同右、六四三～六四五頁。

42 同右、六四五頁。

43 「台湾日日新報」一九一一年四月二日。

44 「台湾日日新報」一九一一年四月一五日。

45 「大阪朝日新聞」一九一一年四月六日。

46 台湾開教教務所臨時編集部編、前掲『真宗本派本願寺台湾開教史』、四九頁。

47 「大阪朝日新聞」一九一一年四月一三日。

48 日本航空学術史編集委員会編『日本航空学術史1910―1945』（三樹書房、二〇二一年）、二〇一頁。

49 「大阪朝日新聞」一九一一年四月一三日。

50 「大阪朝日新聞」一九一一年四月一四日。

51 「大阪朝日新聞」一九一一年四月一五日。

52 同右。

53 「大阪朝日新聞」一九一一年四月一六日、一九一一年四月一八日。

54 猪口編、前掲『理蕃誌稿　第三編』、一九五～一九八頁。

55 「台湾日日新報」一九一一年四月二六日。

56 猪口編、前掲『理蕃誌稿　第三編』、一九五～一九八頁。

57 「台湾日日新報」一九一一年五月二五日。

58 「台湾日日新報」一九一一年四月一五日。

59 猪口編、前掲『理蕃誌稿　第三編』、二〇一頁。

60 同右、二五一～二五二頁。

61 松室謙太郎編『台北州理蕃誌（旧宜蘭庁下編）』（台北州警察部、一九二三年）、二二五頁。

62 同右、二二〇頁。

63 「台湾日日新報」一九一一年八月八日。

64 例えば「大阪朝日新聞」一九一一年八月二一日付の記事の中では「ハユン、ロシン、ナヴィ」として、「都新聞」

一九一一年九月三日付の記事の中では「ハイエンロシン」として紹介されている。

65　なおこの時期の「内地」観光に、霧社事件の主導者となるモーナ・ルダオが参加したことについては、「霧社事件の顛末」(台湾総督府、一九三〇年)における記載「マヘ社」頭目「モーナルダオ」(推定四十八歳)は兇行の総指揮に当れる者なるが、…(中略)…明治四十四年南投街を観光し、続いて内地観光を為したるに拘らず頑迷にして社会の大局を悟らず…(後略)…」(山辺健太郎編『現代史資料22　台湾2』、みすず書房、一九七一年、五八六頁)などを根拠として、たびたび言及されてきた。また宇野利玄は論文「台湾における「蕃人」教育」の中で、モーナ・ルダオが「観光」と称して下山させられた背景について詳細に論じた上で、モーナ・ルダオが参加したのは一九一一年八月から九月にかけての「内地」観光だっただろうと推察しているが、その注記で次のように述べている。「明治四四年には、第一回(四月)とこの回の二度内地観光が行われているが、第一回は参加者の氏名が『理蕃誌稿』で確認できる。なお、明治四五年八月(ママ)の第三回、大正元年一〇月の第四回は、主にタイヤル族の内地観光で、これにも南投庁(霧社を管轄)からの参加者があり、時期を確定することはできない。」(戴國輝編『台湾霧社蜂起事件：研究と資料』社会思想社、一九八一年、一一〇頁)。つまり宇野は慎重に、時期を断定することは避けている。ただし阿部純一郎が指摘するように、モーナ・ルダオは一九一一年に「内地」観光に行ったというアウイ・ヘッパハの証言もあり、モーナ・ルダオが一九一一年八月から九月にかけての第三回「内地」観光に参加した可能性は高いと思われる(阿部、前掲『〈移動〉と〈比較〉の日本帝国史』、一八七～一八八頁)。だが「台湾日日新報」掲載の第三回「内地」観光団参加者の中にその名前はなく、また管見の限りでは他の第三回「内地」観光に関する諸資料においても、確認することができなかった。さらなる資料発掘を試みたい。

66　「大阪朝日新聞」一九一一年八月二一日、「萬朝報」一九一一年八月二九日など。

67　「大阪朝日新聞」一九一一年八月二〇日、「台湾日日新報」一九一一年八月二九日。

68 「大阪朝日新聞」一九一一年八月二一日。
69 「東京朝日新聞」一九一一年八月二二日。
70 「東京朝日新聞」一九一一年八月二四日。
71 「大阪朝日新聞」一九一一年八月二四日。
72 「台湾日日新報」一九一一年八月二七日。
73 「新愛知」一九一一年八月二七日。
74 猪口編、前掲『理蕃誌稿　第三編』、二五一頁。
75 「萬朝報」一九一一年八月二九日。
76 「都新聞」一九一一年八月三一日。
77 「萬朝報」一九一一年九月一日。
78 「萬朝報」一九一一年九月二日。
79 「萬朝報」一九一一年九月三日。
80 同右。
81 「東京朝日新聞」一九一一年九月五日。
82 「萬朝報」一九一一年九月四日。
83 「東京朝日新聞」一九一一年九月五日。
84 「萬朝報」一九一一年九月五日。
85 「東京朝日新聞」一九一一年九月六日。
86 「萬朝報」一九一一年九月七日。
87 「台湾日日新報」一九一一年九月一三日。
88 猪口編、前掲『理蕃誌稿　第三編』、二五二頁。
89 「台湾蕃人内地観光に関する件（一）」ＪＡＣＡＲ（アジア歴史資料センター）Ｒｅｆ．Ｃ０８０２０２２５５００、明治四五年～大正一年、公文備考、巻一六七、雑件三（防衛省防衛研究所）。
90 同右、第三九画像～第四〇画像。
91 同右、第四一画像～第四二画像。
92 「台湾日日新報」一九一一年九月二四日。
93 「萬朝報」一九一一年八月二九日。
94 前掲「台湾蕃人内地観光に関する件（一）」、第六九画像。
95 同右、第四六画像。
96 同右、第四九画像。
97 阿部純一郎は、その著書の中で、「明治四十四年九月「内地」観光蕃人感想」など台湾原住民の感想や反応に言及した資料に関して、「この種の記録を扱う際に気を付けるべきは、これらの記録を、政策実態と関連づけて評価することである。政策実態との整合性を探ることなく、

記録の信憑性を端から否定すること――〝結局それは事業の成功を印象づけるために統治者側がでっちあげた言説にすぎない〟というような――は、これらの言説が生産された場――植民地状況――に対するステレオタイプ化されたイメージを分析以前に持ち込んでいるにすぎない。我々はむしろ、安易な信憑性批判に向かう前に、日本の至る所に軍隊が配置されているというこの印象が、観光ルートが軍事関連施設に集中していたために起こる、かなりの程度まで〈つくられた印象〉だったことに留意しておきたい。」（前掲『〈移動〉と〈比較〉の日本帝国史』、一七六～一七七頁）と述べている。この指摘について、全く異論はない。ただし、阿部は同著第六章において台湾原住民の「内地」観光について第一回から第五回までの全体的な傾向を論じているが、むしろそれぞれの回は独立したものであり、それぞれの回ごとの「観光ルート」の中で「つくられた印象」は論じるべきではないかと考える。その観点から、本稿では第二回、第三回の「観光ルート」について順を追ってたどった。加えて感想を語ったとされる人物について、できる限り個々人の背景を掘り下げて論じることを試みた。

98 「東京朝日新聞」一九一一年九月一日。

99 「東京朝日新聞」一九一一年九月二日。

100 猪口編、前掲『理蕃誌稿　第三編』、五九七～五九九頁。

101 松室編、前掲『台北州理蕃誌（旧宜蘭庁下編）』、五六頁。

102 同右、八二頁。

103 なお各地での軍隊訪問の際、繰り返し見せられた大砲の実演については、その砲声の大音量と振動に恐怖し、自分達の故郷に時々地震があるのは日本でこのようなことが行われているからだと言い、また「今ノ砲声蕃社ニ聞エ家族等憂慮ナシ居ラサルヤ」と心配する感想もあったという（「台湾日日新報」一九一一年九月二四日および前掲「台湾蕃人内地観光に関する件（一）」、第五一画像）。目の前の軍事的な実演は、観光団の中に故郷に及ぼす影響への心配も引き起こしていたといえる。

104 前掲「台湾蕃人内地観光に関する件（一）」、第六〇画像～第六一画像。

105 同右、第六一画像。

106 阿部、前掲『〈移動〉と〈比較〉の日本帝国史』、一七八～一八三頁。

107 「新愛知」一九一一年八月二七日。

108 例えば愛知県旧八名郡七郷村役場文書『明治四五ヨリ大正二年迄　雑書綴』『大正三年　雑書綴』（新城市教育委員会所蔵）より、一九一一年から一九一四年の時期に、第二次「五箇年計画理蕃事業」のもと、台湾での「討蕃事業」に従事する「討伐隊」への慰問袋の募集が、愛国婦人会を通じて、この地域で五回にわたって行われたことが確認できる（松田、前掲『帝国の思想』、第四章参照）。

109 松室編、前掲『台北州理蕃誌（旧宜蘭庁下編）』、二三五～二三九頁。

110 同右、二三八～二三九頁。

111 大津、前掲『理蕃策原義』、三七～四〇頁。

112 松室編、前掲『台北州理蕃誌（旧宜蘭庁下編）』、二五〇～二五二頁。